

---

# リリカルなのは.hackers (仮題)

C E L L E

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは・hackers（仮題）

### 【Nコード】

N2264Z

### 【作者名】

CELLE

### 【あらすじ】

・hack / G・U・とりりカルなのはのクロス。開始は無印なのは原作4話終了後まもなく。カップリングは未定。  
作者のネーミングセンスはアトリ並み…

**P r o l o g u e : A p p w i z ・ M o r g a n n a (前書き)**

以前投稿したものの設定を改変させてます。

## Prologue : Appwiz・Morganna

我、お前に問う。

一つは安全だが長い道。一つは険しいが短い道。

お前はどちらの道を行くのか、答えよ……

Prologue : Appwiz・Morganna

何処までも続く夕暮れの荒野。そこにあるのは乾いた風と 剣  
戟の音。

「あ、ああ……」

3人組の いや、既に一人は事切れて倒れている冒険者のパー  
ティーを取り囲む無頼の者たち。その頭領たる女斬刀士フレイドは手に持つ  
剣を少し弄んだ後、残っている片方の男を無表情のまま切り捨てる。

「ひいッ……あ、あああ……」

仲間がまるで小枝を払うかのように倒された事に動揺する術師の  
少女。そして頭領の女斬刀士の冷たい眼差しを見、その場から逃げ  
ようと駆け出した。

だが、現実には甘くない。すでに彼女の逃げる方向には2人の男が  
立ちふさがっていた。

下卑た笑いをする細身の双剣士ツインソード、そして身の丈ほどある大剣を持  
つ無表情な太った撃剣士フランディッシュ。

「た、助けてください…」

先回りされたことに動揺し尻もちをつく少女は縋るよう彼らに命乞いをした。だがその背後からはゆっくりと…ゆっくりと口端を歪め、せせら笑いつつ手に持った剣を弄ぶ先ほどの女斬刀士が近づいていた。

そして、少女は断末魔を上げる事すら許されず、女斬刀士の喜悅の声と共に散った。

その光景を高台の上から静かに見ている影がいた。

その身に纏うは漆黒の重鎧。スマートながら刺々しく装飾を施されたその姿は触るモノすべてを切りつける鋭利さを持っていた。そしてその鎧を身に纏う白髪青年は踵をゆっくりと返し…これから始まるであろう『彼による』虐殺シヨールを思い浮かべ静かに嗤っていた。

女斬刀士はいつものように狩りをしていた。道行く冒険者を徒党を組んで襲い、その身ぐるみを剥ぐPKプレイヤーキラーであった。すでに冒険者ユーザーに名の知れたその女の名前はボルドー。所属するギルド『ケストレル』においてギルドマスター『がび』を心酔する歪んだ少女だった。

いつものように襲い、そして斬り伏せた女の頭を踏みつけつつ次の得物を思索する。

彼女にとってPKとは息をするような自然な行為であった。日ごろ『現実世界』で溜まったストレスや鬱憤を他人に気が済むまでぶ

つけ、踏みにじり、命乞いをする者を冷酷に処する悪役が彼女の口演技でもあり愉悦でもあり、また彼女が内心で恥じているものだった。

そして享樂にふける彼女らに背後からゆっくりとに歩みよる者がいた。

そしてその影は徒党の一員である男に近寄り…その背中を蹴飛ばした。

蹴飛ばされ前に居た仲間の一人に覆いかぶさるように倒れ込む男。その声に後ろを振り向いた彼らはその影を見て表情を一変する。

「死、死の恐怖……！！PKKのハセヲだあ！！！！」

細身の出っ歯の双剣士、ネギ丸がその影を指差し、目を見開きつつ彼の名を口にした。

死の恐怖　それは有名なPKKプレイヤーキラーであるハセヲの異名である。PKたちの恐怖と憎悪の的である彼は100人のPKを斬ったとか、無敗の黒い錬装士とか『The World』のPK全員から狙われているなど様々な憶測や噂が語られる存在。だがその実力は本物であり彼が次に狙う獲物とその勝敗で賭けが催されるほどだった。

「何イ！？」

ボルドーが目を剥く。目の前にいる『戦士』は正しく百戦錬磨の玄人。だが味方は10人以上、たかだか一人でこの人数相手に喧嘩を売るなど常識で考えれば自殺行為もいところである。

だが、彼女の侮りは一瞬のうちに消える事となった。

その言葉を聞きながらハセヲは薄く嗤いつつ手を背に回し双剣を召喚する。手に持つ双剣の名は芥骨<sup>あくたほね</sup>、高速回転するその鋸の様な刃は唸りを上げ摩擦の熱で紅く煌めく。

「フッ！」

短い気合と共に駆け出したハセヲは一瞬のうちに眼前にいた一人を袈裟切りに、もう一人を返す刃で斬り伏せる。そしてその勢いのまま突進し二人組を組んでいると思われる男たちに迫る。

なんで、こんなことに…

畜生、なんなんだこいつは！？

迫りくる死の恐怖に彼らの顔は恐怖に歪む。ただ日常生活<sup>リアル</sup>のストレスのはけ口として始めたPK、徒党を組み数の暴力で獲物を狩るといふ嗜虐的な恍惚感に酔いしれ、今日もたまたま居合わせた不運な冒険者を狩るだけ。その筈だった。

彼らが出来た抵抗は僅か1合、刃を合わせる事のみ。ハセヲの臂力に押し負け武器ごと大きく仰け反らされた後、身を屈め足払いのように繰り出された狩人の一閃のもとに二人まとめて倒される事となる。

その様子に焦ったのは当のボルドーである。ハセヲが自らに標的を定めたと見るや否やその片手剣の峰に手を添え、両手を用いて防御の構えを取る。

突っ込む勢いのままに2合、3合。このままでは押し負けると見たボルドーは素早く後ろに飛び距離を取ろうとするがハセヲはそれを見逃さない。

苦悶に表情を歪めるボルドーに対しハセヲはいたって冷静であった。ハセヲの猛攻が僅かに止まり罅迫り合いとなった瞬間、一人の男が上空からハセヲに迫る。

「ヒヤツハアオオオラアアツー！」

その声は眼の前にいる異質なるモノに対する恐怖を振り払うためか。気合を込め一撃必殺を狙ったネギ丸の攻撃は……地を穿つだけに終わった。

身を翻し、後方に下がったハセヲは双剣を携え周囲を見渡す。

困む敵は4、5人、常人ならば未だ絶体絶命であるが……ここからが彼の、『マルチウエボン錬装士』死の恐怖ハセヲの独壇場である。

ハセヲの使うジョブ『錬装士』は世界において玄人、ないしハードゲーマー好みのジョブだ。キャラクターメイキング時に与えられたポイントを割り振り、そのポイント内で他の専門職の武器・スキルが扱えるようになるというものだ。

だが、世の中そこまで面白い話がある訳でもなく錬装士はその武



器に関して専門職ほど極める事が出来ず、また極めるにしても専門職より膨大な手間暇がかかる。さらに言えば最初からその全てが使えるわけではなく、解放するためには高難度の特殊クエストをクリアしなくてはならない。

しかし、その全てを平均的に極めたプレイヤーの強さは多を個を以て圧倒するにふさわしい実力を持つようになる。

双剣をしまい込み、虚空から召喚するのは巨大な大鎌、首削くひそぎ。彼が選んだ専門職の一つ、鎌闘士フリッカーの武器だ。

鎌闘士の特徴は何と言ってもその長大なリーチと全周囲をカバーできる攻撃範囲の広さである。そして、ハセヲはその鎌闘士のスキルを一線級のプレイヤー並みに鍛えていた。

勢いよく振りかぶり周囲を囲む敵を鎌から発せられた衝撃波で薙ぎ払うスキル『環伐わきり』。初歩中の初歩であるが彼らとハセヲでは強さの次元が違う。その初歩スキルですら周囲を取り囲むPKを一掃するのには十分であった。

だがボルドー一味もただでは死なない。スキルの硬直を狙い、複数のPKが空からの強襲を同時に仕掛けていく。だがそれすらもハセヲにとって誤差範囲内であった。

「ハアツー!!」

気合を入れハセヲもまた空へ飛ぶ。そして繰り出したのは対空スキル『天葬蓮華てんそうれんげ』。まさに各々が得物を振りかぶり、襲いかかろう

とする敵を先の『環伐』と同様円を描くように一閃、有象無象を軽々と地に叩きつけた。

ハセヲはこれで10人近くをわずか数秒で葬ったことになる。誰の目から見ても明らかに格が違っていた。だが、その光景を見ても諦めない、いや抗うしかない者たちがいた。

「うおらっしやオラア！！！！」

ネギ丸はハセヲの着地硬直を狙い叫びながら駆け出していた。狙うは手に持つ鎌。武器を弾き飛ばせばまだチャンスはある…そう踏んでいた。

そしてその企みは成功する……最初の段階までは。

武器を弾き飛ばしこれで反撃を企てようとしたときネギ丸の眼前には刺々しい装飾が施された漆黒のグローブ、その掌が向けられていた。

「へへ……へ？」

アドバンテージを得た事に僅かに気が緩んでいたネギ丸はいきなり向けられた掌に呆けたような声を上げてしまった。それは非常に…そう、非常に捕食者の前でとる行動としては不適切な行動だった。

次の瞬間、掌からはハセヲが詠唱していた魔法『レイザス』が勢いよく放たれ、ネギ丸は遙か彼方へ吹き飛ばされる。

断末魔を上げ、二転三転と地面に熱烈なキスをしながら吹き飛ばされていくネギ丸。そしてそこに彼の敵を討たんとハセヲの後方から巨漢の撃剣士グリーンが迫る。

いける。

完全な死角からの一撃。さすがにレベル差があるとは言え『The World』において最高の物理攻撃力を持つ職である撃剣士の一撃は重い。撃剣士のグリーンはいつもは細く閉じているかのように見えるその眼を見開き大上段からの斬撃を放つ。

徒党を組み数で押している以上わずかなダメージでも蓄積されたそれはハセヲという名の大山を崩す切っ掛けになりうるのだ。

だが：所詮、ただか針の一穴である。

一瞥もすることなくハセヲはそれすらも紙一重でかわしてしまう。

サイドへと回転しながら飛び、猫のようなしなやかさで着地するハセヲに、追撃を加えんとグリーンが再度大剣を大上段に構えて迫る。それを見たハセヲは楽しげに口の端を釣り上げるとサイドステップでグリンの振り下ろしを避け、迎撃態勢を取る。

次に召喚するのは大剣、おおむかで大百足。グリーンと同じく撃剣士の武器だ。だがグリーンと違うのはグリンの武器はごくごく普通の大剣であるのに対しハセヲの大剣は歪なチェーンソーであった。

空中から自重を利用し渾身の一撃を放つグリーン。だがその一撃をハセヲは唸りを上げる大百足の刃で受け止める。

これに驚いたのはほかでもないグリーンだ。錬装士のそれと比べて大きく性能的アドバンテージのある筈の専門職が繰り出す渾身の一撃：それをハセヲは笑みを浮かべたまま見事に受け止めたのだから。

驚愕するグリーンを余所にハセヲは気合と共に彼を大剣ごと彼方へ

と吹き飛ばす。既に動けるのはボルドー一人だけとなっていた。

「ッチイイ…フツ!!」

舌打ちし、勢いよく駆け出すボルドー。内心では既に彼には勝てないという事実を認めつつあったが彼女にも意地がある。それを胸中に押しとどめ、最後の勝負に打って出た…のだが。

渾身の一撃をハセヲは眉一つ動かさず受け止める。そしてそのまま彼女の剣をいなし、峰で彼女ごと弾き飛ばす。

「…ハア、100人のPKを斬ったって噂も嘘じゃないみたいだね。流石はあの死の恐怖…いやあ、あんたには悪いと思ってるよ?でもさあ、こいつらにはちよつと縁があつてね…別にあんたとやり合おうってワケじゃあなかつたんだ…」

膝をつき片足立ちの状態でボルドーは大きいため息を吐き、つらつらと言葉を紡ぐ…それは単なる時間稼ぎであることは誰の目にも明白なことだった。

ハセヲとの距離は約8m、そして彼はゆっくりと大剣を片手に携えこちらに歩み寄ってくる…その指が弾き飛ばされた剣に向けていることを知ってか知らずか、悠然と。

距離は3m、一気に飛びかかれば反応の遅い大剣では間に合わない距離、これならば

「…だからさ、いい加減に死にやがれええええええええええええええええええええええ!!!!!!」

這わせた指が柄が届き、身をよじりながら無防備な構えを晒して

いるハセヲへと勢いよく胴薙ぎを狙う。タイミング、距離、威力、どれもボルドーが考えられる最高のタイミングだった。

「…で？」

そう、ボルドーが考えられるレベルの最善だったただけだ。

軽々と大剣で乾坤一擲の剣を弾かれ、首筋に巨大な鋸が添えられる。呆けた瞳に映るのは口元が見えず興味なさげに見下すハセヲ。彼女にとつて、彼に会ったことが不幸であった。それは火を見るより明らかで…だが彼女に憐憫を示すものはこの場には居合わせていない。もっとも弱者を狩り続けてきた彼女に同情をするなど同類の下種以外あり得ないのだが。

猛然と回転するチェインソーが彼女のわずかに残った戦意を細切れにした後、ハセヲは沈黙を保っていたその口を開く。

トライエッジを知っているか？

その後、猛然と唸る大鋸の音とこの世の終わりが来たかのような

悲鳴の後、ボルドー一味は仲良くタウンへ強制リザレクトされた。  
た。

というのが、ハセヲとボルドーの出会いだった。

Side：ハセヲ

「ハ、ハセヲ！！こ、こんなもので釣ろったってそうはいかないんだからな！！あたしは借りは返さないと気が済まねえんだよ！！いいな！！絶対には返すからな！！！」

どうしたもんかな、こりゃ。と心なしか顔を赤らめるボルドーを宥めつつフィールドを散策する。

今回、痛みの森にてフレンド総員でのレベル上げ及びレアアイテム搜索実施という荒行企画を立ち上げた櫂を恨みたい。しかもくじ

引きによってできたパーティー（PT）はよりによってボルドーとなつめというPK組だ。（ちなみになつめは自分がPKであることを自覚していない。自覚してはいないが全PK及び限られた『異名付』として恐れられるカオティックPK中最強と恐れられているのは事実である。）

痛みの森ということで二人の装備はレベルキャップ上最強に入る回式・竜頭、古刀・磁晶丸を装備。さらにボルドーは武器に八手サソリの尾、暗殺熊の掌、重芒ヒトデの標本を装備しバックスタブ（後方からの攻撃時確実にクリティカル）+状態異常（凶呪・猛毒）の効果を付与。なつめはネン獺の顎骨（攻撃時一定確率でダメージの25%分SP（スキルポイント、呪紋やスキルの使用時に消費）を回復）を装備してスキル使い放題という構え。

今回の狙いは断頭台の赤苔と反存在の相擁の回収。断頭台の赤苔はHP強制半減効果：ダイニング、反存在の相擁は通常攻撃ヒット時にダメージ値の25%を確実に自分のSPとして吸収する効果：信念の掌握を持つアイテムだ。ちなみに前者がボルドーの要望で後者はなつめの要望である。

ボルドーは珍しくグリンのお願いでとってくる、ということから自分で使うつもりはないらしく折角だから同様の効果を持つ上位種…反存在の汚染を個人的にプレゼントしたのだが…

「い、いいか！あたしがもらったってネギ丸とかに絶対言うなよ！  
！いいな！絶対言うなよ！！！」

……どうしてこうなった。

こいつは昔からどうもこうツンツンしている割に俺に拘る。嫌っているのか？と思っただらそうでもなく「んじゃPT解散するぞー」と言い出すと子犬が部屋を離れる主人を見上げるような目でこっちを見てくるからそうとも言えない。でも好かれているかと思うとツンツンしているし…女心はわからねえ。

更にこんな色モノPTを更にカオスにしているのが最強のPK、カオティックPK『エッジマニア』なつめだ。ハセヲの仲間であり『The World』のグラフィックデザイナー、そして伝説のドットハッカーズの一人である『ぴろし』の知り合いらしく性根はすこぶる善人ではある…のだが、アイテムのこととなると多重人格のように豹変し『ころしてでもうばいとる』を地で行くというなれども扱いにくい女性だ。しかもその時の記憶がきれいさっぱり無くなっていて、増えているアイテムを「きつと頑張っているなつめへの神様の思し召しですね！」とか言っただけ喜んでるあたりが何とも…

そもそも俺には女難の相でも出ているのだろうか？関わってきた女性といえば以前思い人であったとはいえ振ってしまった手前お付き合いにちよつと気が引ける志乃、天然キャラのタビー、電波系のアトリ、露出狂のパイに実は多重人格で男の娘な朔、恋愛しようにも重い背景のある楓、俗に言うツンデレらしい揺光、アスタに関しては論外のネカマだしな…柊？おいこの話でなんであいつの名前が出る？

とは言えアトリと付き合い始めた以上あまり過剰に他の女性（？）陣に関わりすぎるのも問題があるのかもしれないが…まあ大丈夫だろう。



ともかく今は…

「あー、ボルドーさんいいアイテム持ってますね。欲しいなー、欲しいなー、ほしいなー、ホシイナー…」

「！？ハ、ハセヲ！！手を貸してくれ！！！！」

ああ、攻略用に英知の蜀台（消費アイテム効果2倍・アイテムブースト）を装備しておいて正解だったな…破魔矢の召喚符（直線上の敵に光属性大ダメージ）連射、鎮圧と…ふう、疲れた。上がったら望のそこ行って癒してもらおう…

「で、お前ら何してんの？」

ぷすぷすと煙を上げるなつめを尻目に振り返りながらため息をつく。そこにいるのは自分がギルドマスターを務める初心者救済ギルド『カナード』（といっても現状、最高難易度のダンジョン『痛み』の森）のクリアやアリーナの覇者『宮皇』その頂点、伝説のカードゲームマスターを抱えるギルドといった話題で本来の初心者救済というイメージが薄いのだが）の前ギルドマスターのクーン、そして古参のシラバスとガスパーだった。

「あー、ハセヲ…ちょい回復きれてさ、悪いんだけど『快癒の雨』PT全体HP全回復」20個くらい分けてくれないか？」

「ごめんよハセヲ、こっちも『匠の気魂（味方1人のSPを100回復）』を25個ほどわけてくれないかな」

「ハセヲ、おいらも『快速のチャーム（味方全員の移動速度を25%上昇させる）』10個ほど分けてほしいんだぞあ」

カナード組、何やってるんだ…だからあれほどアトリと組んで回復設置しておけと…ああアトリは櫂と楓んとか…って櫂いるなら回復役いらなと思うんだけどな。あいつアイテムフルストックでコンプしているし。

「んで、何時からいた？」

「いや、お前らがなつめちゃんとうんざりしているところからだけど…なんかあったのか？」

「…いや、いい。ああ攻撃アイテム系足りているか？…たつく足りてねえなら早く言え、ほらよ」

カナード組に手持ちのアイテムをいくつか渡す。クーン、一応元ギルマス（ギルドマスター）だろ…女の尻ばかり追ってないでしっかりしてくれよ。

「ハセヲ！…何ぼさつとしてんだ！早く先行くぞ…！」

そう思えばボルドーの声。ああ、こいつはこいつで不機嫌だしなんで俺ばっかり…

ハセヲの苦難は続く。

Side:アトリ

「「「「おつかれさまー！」「」「」」

ああ、やっと終わった。楓さんと櫂さん…現在の『月の樹』最高戦力のPTだったから対してきつくもなかったけどレアアイテムの回収はできたしこれでよし、と。

『痛みの森』は風景変わらないし殺伐としているしラッキーアニマルもいないし正直めんどくさいところだと思う。以前の私なら絶対に行かない場所の一つだね、間違いない…ああ、久しぶりにハセヲさんと二人つきりでサーバーに飛んでゆつくりしたいなあ。

そういえば楓さんに色々聞いてみたけど…ああ、大人の恋愛って難しいなあ。「まだお二人とも若いのですから節度をもって付き合ってくださいね」って…まあそれはそれで聞の話とかも聞いたりしたけど実行に移す日はそう遠くない…はず！

ハセヲさんと出会う切っ掛けになった『The World R: 2 (ザ・ワールドリビジョンズ)』も殆どゲームクリアの領域に達してしまっただんですね。それはそれで寂しい気もするなあ…続編も出るって聞いたけどハセヲさんに聞いたら「アトリがやるならやるかな」って…あーもうハセヲさん無意識に女たらしだからなあもう！そう言われたら止めるわけにいかないじゃないですか！

私たちに『碑文』がある以上、最初から辞めるという選択肢は存在しないんですけど。一応CC2社から給料支払われるようになってしまったわけだし…といっても八咫さんが支払っていると聞いて

たけどどうなんでしょう？本人に聞いても「リアルな時間を割いてもインしてもらったことがある上、あちらの不祥事の問題もあるので貰ってもらわないと困るのだろう」ってはぐらかすばかりだし。一応貰えるものはもらっておいてまた東京行の資金にしておこう。

パイさんからお兄さんの法要にも顔出してほしいって言われてたし…

『The World』を始めてから本当に交友関係が広がったと思う。ハセヲさんが引きこもりタイプのゲーマーではないからその影響かもしれないけど…

オフ会に行ったときは大変だった。望君が一体どうやって一人旅の了承をとったのかが未だにわからない。本人は朔の言うとおりにやっただけだよ？って言うってたけどその朔さんのとった策がすごく気になる…あ、楓さんや松さんと色々話したのは面白かったなあ。槐さんは実家の都合で無理、ということを手紙だけだったけどむこうで元気にやっているみたい。

あとボルドーさんは羨ましいと思う。ハーフって反則じゃないの？ポリユーム的にもスタイル的にも。確かに嫉妬するなあ…本人はそれでストレス溜まってやってらんないとか言ってたけど…

揺光さんは揺光さんでハセヲさんに熱烈アタックしているし。むう、同年代のライバル…性格よし器量良しとききましたか。本人も「まだ諦めたわけじゃないから！絶対に負けないからね！！」って宣言布告されたし…

…揺光さん、露骨に当てていくのは反則じゃないんですか？恋する乙女は無敵ってそういう意味なんですか？

白馬の王子様って意味なら、私も同じなんですよ？揺光さん…

そうやって物思いにふけってるうちにどうやら残っているのは私だけになっていた。みんな私を置いて解散していたらしい。一言くらい言えばいいのに…そう頬を膨らませながら一度ログアウトしようとした時、不意に音が聞こえた。

「…あれ？」

それは、私が良く知る音。私の碑文はとりわけ耳がいい。それにこの音は…忘れられるはずもない。

「…一応、八咫さんに連絡だけはしといたほうがいいかな」

何故、今…そんな思いを抱きつつ、私はメールを起動した。

**P r o l o g u e ・ A p p w i z ・ M o r g a n n a ( 後 書 き )**

ルビの練習をかねて。うまくできていますか？

感想やもしあれば誤字報告など、お待ちしております。

Vol.1 : 産声

それは、ただひたすらに。  
それは、ただひたむきに。  
それは、ただ一途に。

願いの果て、救いを求めて。

Vol.1 : 産声

Side:なのは

「ねえユーノ君、ユーノ君が読んでるそれは何なの？」  
勉強机に座り今日の宿題をやり遂げ、時計の短針が9を越えたのを見た私はふとベッドの上で新聞を読むパートナーの魔法使いにしてフェレットのユーノ・スクライア君に声をかける。いつもだと大人しくしている彼は珍しく熱心に記事を読んでいるようだった。

「ああ、なのは。こっちに来て何もしないとこのも発掘者の一族の一人としてはいけないかなって思ってたね。こっちの新聞の面白そうな記事をファイリングしようかなと思ってさ」

「へえ、記事の切り抜きかあ…ねえねえユーノ君、なんか面白い記事でもあったの？」

うん、これとかどう？つとユーノ君が私に見せたのは『サイバーコネクト社、アルティメイト社のOSを利用したクラウドコンピュー

「『ディングに関する基盤システムを発表』」との記事だった。

「…ねえ、ユーノ君。クラウドコンピューティングって何かな？ ユビキタスコンピューティングとか言ってたやつ？」

「んー、厳密には違うんだけど似たようなものかな。簡単に言うとユビキタスコンピューティングって言うのが人に意識させないでその恩恵を与えるコンピュータで、クラウドコンピューティングって言うのが処理をネットワークを介するサービスに任せて効率化を図るって感じなんだけど…そうだね、『僕たち』風に言うとユビキタスがデバイスでクラウドがその処理を他人のデバイスに任せるって感じかな」

他人のデバイスに任せるってそれいいの？ という私の問いにユーノ君は「そういうサービスなんだよ」って答えてくれた。

私は私立聖祥大学付属小学校に通う、小学3年生。高町なのは、少し前にこのフェレットの姿をしている魔法使いユーノ・スクライア君と出会って、私は魔法使いになりました。…：…まだ半人前だけだ。

私が手にしたのは魔法と、そして魔法の杖『インターネットデバイスレイジングハート』。

そして私がしているのは、ユーノ君が発見した『願いが叶う宝石』ジュエルシードの暴走を封印すること。

最初こそジュエルシードの力で変異した動物や植物に苦戦していたけど、今はユーノ君との特訓の甲斐あってそれなりに戦えるようになりました。

「にしても横文字だらけで難しいなあ。日本人ってどうして横文字



好きなんだろう？日本語の方がわかりやすい気がするんだけど」

「レイジングハートの所為かも知れないけど、英語が喋れるなのがそれを言っても…まあ確かに横文字だらけで調べないと『なんか凄そう』ってだけで終わりそうだね」

そう言ってユーノ君と笑いあう。ちなみに和訳はユーノ君曰く「僕にはまだ日本語の語彙力が足りないから変な風に訳しそうだから止めておくよ」との事だった。語彙力という単語が出る時点で大分日本に馴染んだ気もするんだけど…

「でもどうしてユーノ君は技術関連の記事を？ユーノ君のいた管理世界ってどこだともうこういうシステムも出来上がっているような気がするけど…」

「ああ、それは…ツ！？なのは、今の」

ユーノ君が強い魔力の波動を感じた。それは私も同じ…そう、突発的な魔力の膨張が意味することは一つ。

「こんな夜中に発動しなくても…ユーノ君、結界お願い！場所はそんなに遠くないみたいだし…レイジングハート、お願い！」

ユーノ君に周囲への被害を防ぎ一般人を巻き込まないようにする封時結界の発動をお願いして、すぐさま私もバリアジャケットを展開する。

私が通う私立聖祥大学付属小学校の白と青で彩られた制服をモチーフにして作られた私の魔法の服（バリアジャケット）。レイジングハートにより精練されたその衣装はその見かけからは想像できないような防御力を持っている。地面に叩きつけられたりしてもかすり傷程度で済むのは魔法の凄いところだと思う。

レイジングハートもネックレスの飾りの珠から、魔法の杖に相應しい長杖へと姿を変える。

「レイジングハート、狙撃できるポイントはある？」

Area Search: Route retrieval  
and. There is no place that can  
be sniped at it.

狙撃ができない…なら発動はしていても周囲を巻き込んでおらず、かつどこか狭い場所にあるということ。

「なのは！結果は大丈夫だよ！」

「ユーノ君、近くに行くしかないみたい…急ごう！まだ周りに何も巻き込んでいないうちに封印しなきゃ！」

Flier fin.

ユーノ君を肩に乗せた後飛行魔法を発動させ、反応のあった場所へと急行する。相当なスピードが出ているはずだけど私を感じる風は丁度よいくらいに緩和されている。全くの無風ではないところが気持ちいい。

「見つけた…！これならすぐに封印できる！」

問題のジュエルシードは電柱の陰で淡く蒼い光を放っていた。周りが無機物だったために周囲のものを取り込まなかったのかな。

レイジングハートをシーリングモードに変形させ、速やかに封印する。発動とはいつても周囲の『願い』を取り込んだわけでもないように力も乏しくあっけなくその輝きは消えた。

ふと封印したジュエルシードのナンバリングを確認するとそこに刻まれた数字は『?』。これまで封印してきたものはとびとびだった。なのでこれはこれで新鮮な気がする。あくまでも気分の問題だけ。

そう、油断した時だった。

Warning! Enemy is approaching  
now!

「!来たんだね、あの子が!」

不意に強まる魔力反応。速度、大きさ。そしてこの街にいる魔導士は、知っている限り私達ともう一組しかいないはず。

それに、私がこのプレッシャーを間違うはずがない!

「:やっぱり、あなたか」

風にさらさらと流れる金髪。はためく黒いマント。そして冷たいワインレッドの瞳。もう一人のジュエルシードの探索者の女の子。そしてその横には真っ赤な髪をした、勝ち気でちょっと怖い目つきをした女の人が立っていた。

二人ともそれぞれデバイスを、拳を構えて臨戦態勢に入っている。

「:やっぱり、そうするしかないのかな」

「:今は、言葉はいらぬ。ジュエルシード、今度も貰う!」

「:そう何度も勝てると、思わないでッ!」

合図も、掛け声もなく同時に魔法を詠唱する。きつと、彼女なら今そうすると確信していたから。そしてきつと彼女もそうだったの

だろう、お互いのデバイスに魔力が集中する。

「なのは！」

「おっと、ちつこいの！あなたの相手は私だよ！！！」

ユーノ君は赤髪の人との戦いになった。たぶん、私を援護しようとしてくれたんだろうけどそうはいかなくなつたみたい。

「サンダー……」

「デイベイン……」

見上げる私と見下ろす彼女。魔力が収束していく。私が放つのは今、自分が使える最も得意な魔法。そして向こうの魔法はきつと今彼女の手札として、この場で見せられる最適の魔法。

「レイジ！！！」

「バスター！！！！！」

示し合わせたかのように砲撃魔法が同時に放たれる。あの子の魔力もすごいけど、私のデイベインバスターはそう簡単に打ち負ける魔法じゃない。

金色と桃色の光が正面からぶつかり合い、爆発する。まったくの互角。でもそれはきつと彼女によって仕組まれた互角。周囲の視界が霧散した魔力で遮られ、あの子の姿が見えなくなる。そしてそれは、彼女が仕掛けてくるのに最適な煙幕となる……！！

「バルディッシュー！！！」

Scythes Form

「やっぱり！レイジングハート！！！」

P r o t e c t i o n

金色の鎌を振りかぶった彼女は予想通り背後から奇襲を仕掛けてきた。でもそれはお見通し。私も素早く防御魔法を張り、それを受け止める。

「今ッ！」

D i v i n e S h o o t e r

刃を受け止め、鏢迫り合いのような形になったところで彼女を挟み込むように魔力スフィアを形成、逃げられる前に素早く打ち込む。

「つく、でもまだ甘い！」

B l i t z A c t i o n

だけでもあの子に小手先の手がそう簡単に通じるとは思わない。予想通り一瞬で十字砲火の射線から後退し体勢を立て直す。やっぱり一筋縄にはいかない。

ほんの数合だけど、打ち合ってよくわかったことがある。

あの子に接近戦は無謀。彼女は私よりずっと動きも速いし、武器の扱いも手馴れている。私だって目は追いつくけど体が追いつくかと言ったらそれは無理だと思う。せめてもう少し運動神経があれば、と思うけどないものを言っても仕方がない。

「まだまだ行くよ！ダイバインシューター！！！」

だから私は、近づけないように弾幕を張る。それがたぶん、この場での最適解！

「やるね、でも！」

彼女は大鎌を大きく振りかぶり、タイミングを見切って直撃コースの魔力弾を叩き落とす。そしてそのまま魔力スフィアを形成、私に向かつて打ち返してきた。

それを空中に逃れることで回避。お返しに再度ディバインシューターで牽制を放つ。彼女もまた急上昇、ロールしながらそれを回避し、大きなバンクを描いて上空に陣取る。

ユーノ君に習った空中戦の基本、敵より高所に…それをきっちり守っている彼女は流石だ。でも、彼女が負けられないように、私だって負けられない！

お互いにデバイスを振りかぶり、一直線にぶつかり合う。高度を取られた分向こうのほうが重さはある、だけど私の防御はそれだけじゃ打ち抜けない！

「硬い…ッ！」

「く、うつつうつつ！」

でも、彼女の一撃は重かった。さっきの様に周囲に魔力スフィアを作る余裕なんてない。この子もプロテクションを破るつもりで仕掛けたらしくほかの余裕はなさそうだった。

飛び散る魔力の火花。勢いに乗ってきた彼女の一撃で数m押し込まれたけど、そこで止まる。そこから徐々に、徐々に私が押し返す。

「こんな短期間で、前より強く…！」

「やあああああああああ…！！！！！」

彼女の端正な顔が苦悶で歪む。今度は私の番：そう思った時だつた。

地表から感じる誰のものでもない魔力。それはじわりじわりと染み出るようにジュエルシードから放たれていた。

なんで？ いったいどうして？ 私はたった今確実に封印処理をした筈。でも…なんで封印したはずのジュエルシードがまた発動しているの？

それには彼女も気づいたらしくお互いに素早く距離を取った。

「なのは！ よくわからないけどこのままじゃまずい！ 一旦戦闘を止めるんだ！！」

ユーノ君が叫んでる。　　そうだ。ぼけっとしてる場合じゃない。急いでもう一度封印しないと。

そう思いデバイスをシーリングフォームにしようとした刹那、あの子は一瞬でジュエルシードに近づき、それを持った次の瞬間、足元に金色の魔法陣が現れ文字通りその場から消えてしまった。

「しまった！」

「ざーんねん、それじゃあねえ」

ユーノの対面に立つ赤髪の人の足元にも赤い魔法陣が浮かび上がり、一瞬で姿を消してしまう。

「転移魔法…やられた…！」  
あとに残されたのは、呆然とする私と悔しそうに口元をゆがませるユーノ君だけだった。

S i d e : フ ェ イ ト

私たちが拠点としているアパートの屋上。そこに私は発動しかけのジュエルシードを持ってアルフとともに転移した。

「よし、うまくいった…」

「さすがフェイト！ちよつとずるっこいとは思っけどジュエルシードはこつちのもの、あとは封印するだけだね」

「うん、それじゃ早く封印しよう」

アルフの言葉にうなずく。そう、確かにあまり褒められた手段じゃなかったと思う。あの白い子が気を取られた一瞬の隙に、発動しかけのジュエルシードと一緒に転移。決着もつけずに奪った形になるけど、彼女と本格的に戦わずに済んでよかったと私は小さく安堵の溜息を吐く。

仄かに青い光を放つジュエルシード。白い子が先に施した封印の為か、その光は弱弱い。これならそう魔力を使わずとも、封印を少し強化するだけで終わるだろう。

そして、これを集めてくれれば、きっと母さんは元の優しい母さんになる筈。また、『昔』のように楽しい日々が…



そう思った刹那だった。

「！フェイト！！離れて！！」

突然手元のジュエルシールドが先ほどの弱弱しい光から一転、強く輝きだす。

しまった、雑念に反応したんだ…！

アルフの声に反射的に反応し、ジュエルシールドから離れた私はそう結論付けるとバルディッシュをデバイスモードからシーリングモードに変更する。急がなくては、何が起こるか分かったものじゃない。そう思い身構えた。

詠唱、魔力を練る…と、ジュエルシールドの光が青から赤黒いものに変わった。

赤黒い光。傍から見れば邪悪なイメージしか湧かないだろう。だけれどその光は、周囲に害を及ぼすような圧迫感ではなく、どこか美しい、優しい色を帯びていた。

一体、何が。

そう口を開こうとした時だった。

ジュエルシールドから飛び出る赤黒い糸。それは絡みあい、人の形を形作っていく。

大きさは私と同じくらい、何重にも網の目の様に絡み合っていく。

そして糸が編み終えた私と同じ大きさの『人形』は、光の粒子と

なつてはじけ、それと同時にジユエルシードの輝きも消えた。

光が弾けた後に浮かぶのは、くすんだ金色の金具と真つ黒いベルトをいくつも鎧のように巻き付けた銀髪の少年。目をまたぐように赤い稲妻を模したかのような小さな紋様があり、その顔からはどこか刺々しい印象を受ける。その両手には無骨で歪な双剣が握られていた。

「誰なんだい、こいつは!？」

アルフが驚きながらも身構える。そう、彼はイレギュラー。ジユエルシードから人が飛び出るなんて私は聞いたことがない。母さんなら何か知っているかもしれないけど、今は連絡するすべがない。

油断なくデバイスを構えていると、地面に降り立った彼がゆつくりと目を開く。真つ赤な、まるで夕日の様に赤い目。一瞬呆けたような顔をした彼は私たちの姿を確認するとすぐにその顔つきを鋭く険しいものへと変えた。

「…だれだ、てめえらは」

重心を落とし、双剣を素早く構えて、低い、強い敵意のこもった声で彼は私達に問いかけてきた。これをドスの効いた声、とか言うらしいけど、男の人のこんな声を聴いたのは初めてだ。

「…それはこっちの台詞。あなたは、誰？」

私も油断なく構えたまま、彼に問い返す。

「俺か、俺は…」

そう彼が口を開き言葉を続けようとした、が…そのまま固まってしまった。

「あなたは、何？」

怪訝に思い、再度尋ねる。ただ、さっきの様に威嚇するような声ではなかった。それは彼から感じる敵意が急激に薄まったから。

「俺、は…俺は、誰だ？」

そう彼は呟くと苦しそうに双剣を取りこぼし、頭を押さえ地面に膝をついた。

「！？だ、大丈夫！？」

慌てて彼に駆け寄る。息は荒く、顔は苦痛にゆがんでいた。素人目に見ても、それは大丈夫そうではない。

「アルフ、お願い」

「…はあ、まったくフェイトは優しすぎるんだよ…っ」と

私はすぐにアルフを見やるとアルフもどこか諦めた風に近寄り、ひよいと彼を抱え上げる。彼は辛そうに唸るばかりで抱え上げられたことにすら気づいていないようだった。私は彼のデバイスと思われる双剣と輝きを失ったジュエルシードを拾い、アルフの後に続く。

飛翔魔法でそのまま私たちの部屋へ。寝室にまっすぐ向かい、ベッドに彼を寝かせる。顔色は青く、あまりいい状態のようには思え

ない。とはいっても私には治療魔法の心得はなく、アルフももっぱら戦闘用の魔法がメインだ。支援はバインド、結界くらいしか扱えない。

とりあえず彼のデバイスを床に置き、どうしようと思いいあたふたする私と、頭をわしゃわしゃと掻くアルフ。その間も、彼は苦しもうに呻いていた。

「えっと、アルフ、こういう時ってどうすれば…」

「それをあたしに聞かれても困るよフェイト、あたしだって初めてなんだ、ジュエルシードから出てきた人間、そしていきなり苦しみだしたときの対処なんて」

「と、とりあえずお医者さん？」

「駄目だよフェイト、私達じゃこの世界の医者にはかかれないよ」

「そ、それじゃどうすれば…あ！」

私はあることを思い出す。『昔』していたこと。熱で寝込んだ母さんにしたような覚えがあることを。

そっと彼の手を握る。苦しまないでと。少しでも彼の苦しみが和らぐようにと。

最初、苦しみのせいか強く握りこまれた彼の手は次第に緩くなり、ゆっくりと彼の苦悶の声も、顔にびっしりと浮かんだ汗も収まっていく。

数分後には小さな寝息を立てて彼は眠ってしまったようだった。

「まったく、いったいなんだってんだいこいつは」

「そう、だね…私にもわからないや。とりあえず明日、彼が起きた時に話を聞こう。あ、デバイスはアルフが預かってて」

「あいよ、しっかしまあ…今日は変なことづくめだねえ、まったく」

呆れたようなアルフの声に、私は小さな笑みで答える。そしてデバイスを拾うアルフを見て、そっと握っていた手を放す。彼の手は無骨で、硬かったけど、どこか暖かい感じがした。

それが、私とハセヲさんとの出会い。

それが、私と彼の物語の幕開け。

それが、全ての始まり。

それが、私達にとって忘れられない日々の始まりだった。

Side:アトリ

話は彼が鳴海市を訪れる少し前にさかのぼる。

「ハセヲさん！早く早くー!!」

「アトリ落ちつけよ…ったく」

私はハセヲさんと念願のデート中。約束を取り付けるのにはすくなく苦労しただけあって胸の中はハセヲさんのことであらう。

そもそもハセヲさんには志乃さんっていても、とても大事な人がいる。一応大聖堂で志乃さんではなく私を追いかけてくれたけど…それでも未だに有力候補なのは間違いない。だって「付き合っていない」って言質がないんだから。それに他にも揺光さんをはじめいろんな人がハセヲさんを狙っている。

…特にエンデュランスさんには警戒しないと。エン×ハセはアプカルル（Apkallu）でもなかなか盛り上がっているし同士の腐女子の中ではポピュラーなネタだ。兎角エン攻めハセ受けが多いのはエンデュランスさんの熱烈なアプローチが原因だと思う。特に榊さんの事件の時、榊さんの目を欺くために一芝居打った上で僕は君のために…なんて公衆の面前で言ったものだから…一応、エン×ハセが増えた反動かハセ×エンのパターンだとかなりきわどいものばかりになる。夜のオカズにげふんげふん。

ちなみにアプカルルでアップロードできないようなR-18なもの個人サイトもしくは専門のサーチを使えば文字通り腐るほど…  
…もちろん本人には伏せている。ハセヲさん一応ノンケだし。

ああ、でもどうもハセヲさん時々押しが弱かったりこっち（女子）のアプローチに全然気づかなかつたりするからなあ…

まあ、ハセヲさんがそっちの道に本気で入ってしまうのなら全力で阻止します！もちろん私のために！！

それに「はいそうですか」って諦めるわけにはいかない！私にはハセヲさんを諦めるなんて無理！何もしないで、昔のようにただだんまりを決め込むことなんてもうできない！

私は：いえ、私達はこの世界を。『The World』を救った。それは比喻でもなく、れっきとした事実……あの時は本当に戦争だった。しかもそれまでに幾多の試練が、悲しみが、葛藤があった。

でも私達はそれを乗り越えてきた。ハセヲさんのおかげで私は「私」と向き合うことができた。榊さんに頼り、裏切られ、道具と化しただけの私を立ち直らせてくれた。

そんな彼に恋心を抱かない方が無理と言っている。櫛さんからハセヲさんはイ・プラセルの結婚式のカードを持っているとかそんな噂話を聞いた。

櫛さんの言う『噂話』は確実性が極めて高い。なら、使われる前に勝負を決めるしかない。

恋する乙女は無敵、そうだと思う。私は私の恋路を邪魔するものはあの『化物』であろうと粉碎できる……そんな風にすら思う。

そして『彼女』の座を絶対のものにするためには……なんとしても！なんとしてもデートの約束を取り付け既成じ……もとい足場をしっかり固めないと。

兎に角！！お邪魔虫がいない2人っきりのデートを成功させてハセヲさんを振り向かせて見せる！！そのために！！私は今回ハセヲさんと昔喧嘩したあの場所：私にとって、最も美しく、それでいて最も悲しい思い出のある場所に来ている。

「……しかしお前もここ好きだな……あんなに俺がひどい事言ってしまう

った場所なのに」

ハセヲさんはちょっとばつが悪そうに笑っていた。やっぱり、前の…私がハセヲさんとあって間もないことの事を思い出しているのかな。

！……！  
こんなハリボテ世界の！どこが綺麗だって言うんだよ！

それは私に向けて放たれた言葉。私の心を、深く、深く傷付けた言葉。

でもハセヲさんは今、こうして私のそばで、私を…私とともにいてくれている。だから私はここに来ることができる。

「ハセヲさん、覚えています？ここ…」  
「あー…覚えているよ、あの『紋章砲』…お前が俺たちはこの『The World（世界）』にいる限り、俺たちはこの世界の住人で、たとえフィクションだとしても、それには意味がある…そう言っただよな。」

ハセヲさんはそう言いながら微笑んでいた。まっすぐ、屋気楼のように遠くにそびえる『紋章砲』を見ながら。かつての私と、話をしていたことを思い出すように。

私はちよつと顔を赤らめてしまった。正直覚えていないかも、そう思っただけ出したのに彼はそのことを覚えてくれていた。



「あーそうそう、んであそこは…昔と同じ場所にPop（出現）しているな、あのチムチム。懐かしいな。」

…ハセヲさん、それも覚えていたんですか。私が言った　この世界にはこの世界の命がある。たとえプログラムだとしても、AIだとしても、彼らにとってはこの世界が全てであり命である　ということ。正直、忘れていたのかな、と思ってました。私もここで言ったこと、少し忘れかけてたのに。

「ハセヲさん…よく覚えてるんですね。私の言っていたこと。」

「忘れることできるかよ。俺がお前に言っちまったこと…そして今までを考えれば、忘れることなんかできるかよ」

そう言っつてはつが悪そうに頭をかいた後、懐かしそうに歩むハセヲさん。私は、あなたの言葉に傷つけられました。でも、でもそれ以上に助けられ、こうして歩むことができるんです…

「んで最後はここか…な」

懐かしさに浸りながら、ゆっくりと歩んできたMAP。もちろん道中のMobは悉く倒してチムチムやラッキーアニマルも蹴飛ばしてきたけど…うん、私も変わったんだなあ。昔なら「蹴らないでください！」とか間違いなく言っただははず。もう大分ハセヲさんの色に染まつちやっただなあとつくづく思う……かわいいですねー、っつて言いながら蹴るのって自分でもどうなんだろう。

一応、これは公私(?)の区別ができるようになったってことだと思う。ハセヲさんのような効率重視の人と行く時はごめんねって心の中で言いながら蹴るし、槐さんのようなタイプの人とは時々一緒にラッキーアニマル観察に出かけるようになったし…

最後に、獣神像の祠の前に立つ。

「お前とここで口喧嘩したんだよな…ごめんな。あのときお前のと何も考えずあんなこと口走って…」

「気にしないでください、ハセヲさん。私は、あなたに色々な事を教えられ、助けられてここまで来たんです。今の『私』が『私』でいられるのも、ハセヲさんのおかげなんですから…」

私たちにとって思い出深いただの柱の前に立つハセヲさんは静かに目を瞑り、当時に思いを馳せているようだった。

自分はちよつとずるい女だな、って思う。昔の事を使って話しているんだから。でも、私は絶対に伝えなきゃいけない。ハセヲさんを振り向かせるために。ずっと、ずっとハセヲさんの隣にいるために。以前志乃さんは私にハセヲさんを譲ってくれた素振りを見せたけど本心はどうかわからない。だからここで、確実に…!!

「あの、ハセヲさ「アトリ!!」気をつける…何かおかしいぞ」…え？」

音が、聞こえた。

ピアノの八長調ラ音。

それは、産まれて最初の産声と同じ音階。

だがそれは、私たちにとって別の意味を持つ。

懐かしくも忌まわしい、昔私をさんざん苦しめた音。

私とハセヲさん…いいえ、もっともっと多くの人を惑わし、苦しめた存在…

「A I D A…浄化したはずだ！なんでそれがここにあるんだよ…！」

A r t i f i c i a l l y  
I n t e l l i g e n t  
D a t a  
A n o m a l y

それはかつて私達が戦ったもの。尤もそれ自体はこの世界に普遍的に存在し、危険性は全くなかった。

しかし、突然変異体である『Tri Edge』の出現により、それは一気に危険性を孕む存在と化した。

人の心に寄生し、心の闇を広げ、『世界』を浸食し蝕む存在…さまざまな形をとるが、まず初めにこの世界に姿を見せる際、それは黒点として世界に顕現する。

それを相手に戦ってきた。ある時は自らが飲みこまれ、皆を傷つけてしまったこともある。

だがそれは前の話。今となっては、ハセヲの大切な人であり、憧れでもあり、全ての黒幕であり、最初の被害者でもある恩人によって浄化されたはずだった。

「アトリ、こいつは俺が処理する、お前は櫂に連絡を…!？」

刹那、黒点が震えた。

そして、ハセヲさんは闇に包まれた。

Vol.1 : 産声（後書き）

某所に書いていたものを手直し書き直し。根幹設定はあまり弄って  
ません。

会話と地の文の間を1行空けてみましたがどうでしょうか。字数は  
適切でしょうか。

## Vol.2 : 輪廻

『the world』

それはCC社が開発、運営していた会員数2000万を誇った世界最大のネットゲーム。

しかしその中身には、数多のブラックボックスがあり、一般のユーザーには語られることのない『現実世界』の運命を賭けた戦いが繰り広げられた場所。

そして『世界』は崩壊し、新たに『世界』が形作られた。

過去と同じ過ちを残して

Vol.2 : 輪廻

Side : ハセヲ

静かに瞼を開く。

「知らない天井、だな」

定番、テンプレという幻聴が聞こえた気もしなくはない。だが俺の前にあるのは紛れもなく知らない天井だった。

自分が寝ていたということに気づき、ゆっくりと体を起こす。口グインしたまま眠ってしまったのだろうか。アトリと一緒にいたことは覚えている。『かそけし 赤誠の 怠け者』でアトリと二人でいたことは。だが記憶が混乱している。

志乃を意識不明にした‘ %?? ? J?C?g、その黒幕であった?I?「?」?@?、暴走した?、全ての元凶?s?’? %?—?::???±?::、そして最後の敵?N?r?A::だめだ。

思い出せない。

自分の名前は？三崎…何だ？ハセヲ？分からない。

年齢は？17歳のはず。

性別は？男。

家族構成は？…わからない。なんだってんだ、糞。

一体何が起こつて、どうして俺はこんな場所にいるのか。ここは『The World』の世界なのか。自分の姿だけを見ればここはバーチャルリアリティなのだろうとは思う。とはいっても俺の手は『The World』の中でもこんなに小さくはなかったはずだ。それにどうしてキャラクターデザインが1stのままなのか。そしてなぜメニュー画面が開けないのか。

部屋を見回すと現実ではないかと思う。確かに閉じ込められたとき、草葉の臭いや暑さ寒さなどを感じたことはある。だが実際にプレイしているときにそういったものを感じるということはない。そして何よりこの部屋は現実的過ぎた。

モヤモヤする想いとは裏腹に、窓からは綺麗な朝焼けの光が差し込んでいる。俺は小さく舌打ちして、また見慣れぬ天井を睨み付けた。

「ここは…どこだ。俺は…『誰』だ？」

そう、確認するように口に出して。

とりあえず彼は付けたままの靴や手甲を外すことから始めることにした。外見こそ日本人離れしているが中身は生粋の日本人である

彼にとって…というより常識的に、そんなものを着けたままというのはどう考えてもおかしいからだった。

そして、暫くして昨日の金髪と赤髪が部屋に入ってきた。近場で買ったのであろう、3人分のコンビニ弁当をもって。

Side:フエイト

「ごちそうさま。それで…あなたはその『The World』の世界から転送させられてきた、と。」

「ごっさん…そういうことみてえだな。だが遠見市に海鳴市？そんな地名は聞いたことねえぞ」

この世界、この国では食べ終わった後にごちそうさま、というのが礼儀とのことだった。私はこの国の郷に入っては郷に従え、という言葉通りに手を合わせる。まだ箸の使い方は

苦手なのでスプーンとフォークだが、米粒一つ残さず完食した。

彼は乱暴に胃の中へとかきこんでいたが、その実綺麗に食べ残しもなく平らげていた。箸の使い方もその姿とは対照的に丁寧で、わざとかきこんでいたのかと思ってしまうほどだった。

ここは私の寝室。本来なら私の使い魔であるアルフと私以外存在しないはずの空間。

しかし私の前には、ベッドに腰掛ける1人の少年がいた。

彼は最初こんなところじゃ部屋を汚す、リビングまで行く、と言っていたが昨日のこともある。心配だったのでここで話をしながら



食べようということにした。諦めたように割り箸を取った彼を見て私もお弁当の蓋を開ける。そして誰となく、状況を話し始めて今に至る。

彼は大きいため息をつくと私の前で力なく天井を仰いだ。それも無理はない。いきなり彼の住んでいた…そして彼がいた『世界』からその時過ごしていた姿のままここに来たのだから。

「っーかありえんだろ。なんでデータが実体を持つんだよ…しかも肉つきで。ご丁寧に神経も通って血も流れて」

「それは…この『世界』の魔法に関係があるのかもしれない。この『世界』の魔法はプログラムのようなものだから……」

そう話すと彼は大きいため息をついた。その顔には憤りとも諦めともつかない表情をしている。

私の目の前にいるのは銀髪で筋肉質と言うほどではないがそれなりの体をしている少年。そして彼は黒の多数のベルトにより構成されている胸当、同じく黒を基調としたズボン。ベッド横には彼が脱いだのであろう黒くてがっしりとしたロングブーツ、アームガードと手甲が置かれていた。

「んで、俺が戻る方法は結局わからねえ、か……」

「ごめん。私としてもなんとかしたいけど原因もはっきりとわからなくて…」

「あたしも初めて見る光景だったし…フェイトも私もまったく訳がわからないんだよ」

私とアルフ 犬の姿をしている私の使い魔 の

話を聞き彼はなんとも言えない微妙な表情をしていた。恐らくこちらにも悪気はなく、それでいてどうしようもないことから思考がましまらないのだろう。

「まあ今更どうこう言ったってしょうがねえよ。とりあえずそのジユエルシードだったっけ。それが願いを叶える石なんだろう？」

「そう、だけど正確に叶えるものではなく……」

「それを全部集めりゃ確実性が増す、と。」

「そう。それで、申し訳ないけど協力してくれないかな？」

偶然の被害者とは言え私の素性を全て話す訳にはいかない。だから彼には悪いけど……小さな真実に虚構を入れさせてもらった。まだ本当の目的を知らす必要も、危険性もいらないと判断したからだ。そして協力を要請したのは彼には少なからず魔法の才がある、そう判断したからである。

なぜ彼に魔法の才があると判断したかと言うと彼がこの『世界』に來た時から纏っている服……いや鎧とも言えるそれは間違いなく彼女にとってバリアジャケットそのものだからである。つまり彼は無意識的にバリアジャケットを展開、維持しているということであった。

ところが話を聞いてみると魔法もわからない、服の消し方なんてどうやるんだと言う始末。わざわざ解除すれば消える靴や手甲をいちいち脱いだのもそのためだろう。

つまり彼は無意識的に魔法が使えると言うこと。恐らく彼がこの世界に踏み入れた際に得たものなのだろう。『素体』がプログラムと言っなら、プログラムに近いこの『世界』の魔法に親和性があるのではないかと踏んではいたのだが。

「いや、協力するつつつても……俺はこの『世界』での魔法の使い方も何も分からねえんだぜ？まあ日常生活ならこの世界も向こうと大して変わらねえからできるけどよ」

「それは私が教える。と言うより教えない方が危険だから……あなたは無意識的にバリアジャケットを発生させている。そして制御で

きない力はどうなるかわからない」

一瞬彼の顔に緊張が走った。恐らく『制御できていない』という言葉に危機感を抱いたのだろう。私もリニスから魔法を学んでいたころに制御を失った力はどうなるか身をもって体験している。それに無意識的に魔法が使える逸材なのだ。魔導の力というのは先天的なものに依存する。これを無駄にするのは勿体ないし、私以外の回収者がいる以上戦力は少しでも欲しい。だからこそその『協力』なのだ。

「と言うよりそれしか方法がねーんだろ？……このままお前の話を蹴ったところで俺は野垂れ死ぬしかねえ。資産もなけりゃ戸籍もないならどうなるか馬鹿でもわかる。ならお前と一緒にいるしか選択肢はねえ。違うか？」

「ありがとう。えっと……そのデバイスを待機状態にすることから始めようか。そのデバイスに解除命令を出して」

そう言っただけは机に置かれた双剣　　彼がこの世界に来る時持っていたもの　　を渡す。……正直、今まで見たことのないタイプのものであるが彼が身に纏っているのが『バリアジャケット』である以上あれは『デバイス』なのだろう。

「ああ。分かった。………こう、か？」

Mode release

双剣から少女のような透き通る音声が流れる。その音声直後、彼の双剣は彼の手の中へと『消えた』。私にとってはじめて見る光景だった。

待機状態の存在しないデバイス

いままで見てきた中でも異様。デバイスには待機状態というものがあるのに彼の待機状態は不可視、いや彼の中に取り込まれた、と見るほうがいいだろう。

そして最大の問題は

「あ……………あう……………あうあう……………」

「!!!!フェイト見ちゃだめだよ!!!!!!!」

「んな!?!ちよ、おい!!!!これどうということだよ!!!!?!?」

そこには、顔を真っ赤にする私と、私の視界をふさぐと慌てる使い魔と、顔を真っ赤にして慌てふためく全裸の少年がいた

数分後

「あ、あの……………」

「……………落ち着いたか?」

そう言う彼は微妙な表情をしている。さっきまで私の話をしていた時とは違う意味で、またなんともいえぬ表情だ。

とりあえず彼にはバスタオルを巻いてもらった。流石に全裸の人物と話すことは出来ないしバリアジャケットも魔法がまだ意識的に使いきれない以上展開させたままにするわけにはいかないだろう。

彼には悪いけど私はズボンを持ってない。それよりそれを貸すって事は…し、下着も貸さないといけなくなるし…あ、あう、あうあう……

「お、おい!？」

「ちよつとフェイト!?大丈夫!？」

私の反応を見た2人が慌てている。

いけない、落ち着かないと。雑念を払うんだ。今前にいるのはでっかいかぼちゃだ。そう思うんだ。カボチャに見えないけど。

「と、とりあえず今からあたしらがさ、服買ってくるから……えーと、近くに24時間スーパーあったね。あそこ服も売ってたし行きや何とかなるかな。フェイト、ちよつと外行こうか」

「ああ、そうしてくれると助かる…これじゃ外にも行けねえし女の子の前でこの恰好はちよつとな………」

向こうの2人は私が正常な会話ができないと判断したのだろう…

…いや、気遣ってくれているのか。

彼を1人にするのはどうかとも思ったけどここに客が来ることはまじない。それに今の時間帯も時間帯だ。早朝にいきなり人が来るなんてことはないだろう。

それに下着も着けずタオル一枚しかないっていうのもね……

……

私がアルフと外に出かけるとき、彼は力なく窓を見ていた。

空には都市部特有の星の少ない夜空。

眼下に見えるのは彼にとっては見慣れぬ街並み。

技術的、物質的にはほとんど同じものだけど、全く見慣れぬビル

の群れ。

第97管理外世界『地球』、遠見市の街並みが広がっていた。

Side：ハセヲ

あの金髪、もといフェイト達は行ったか……困ったことになった。そう、非常に困ったことになった。

いきなり今いる世界は全く違う世界と言われ、魔法使いだか魔導士だかという少女と言葉を話す使い魔と名乗る犬に連れられ全く知らないマンションの中。

なんなんだよこれ。俺はアトリと『かそけし 赤誠の 怠け者』にいたはず。それが気がつけばこのざまなんて……これは一体なんだ？冗談にもほどがある。

色々ショックが大きすぎて混乱していたが自分の体がどうなってるか確認しねえと。

とりあえず部屋の鏡に映る姿をしてみる。体には『The World』のキャラクターの特徴である『呪紋』は見当たらなかった。フェイトたちからの話からするとバリアジャケットを展開しているときだけ浮かび上がるらしい……不幸中の幸いだ。刺青なんていたら公共施設が使えないし世間の目がある。

鏡の自分をまじまじと眺める。体格が幼児化しているな。小学3年くらいか？ずいぶんガキな体になっちまった。まあフェイトより背が高かったのはよかった。あれで背が低かったら泣けてくる。若返りつてのは普通うれしいものだろうが、若返ってもうれしくない年頃でガキに戻るとか嬉しくもねえ。それに理由も不明でこうなった身体がこの後どうなるか全然見当がつかねえ。最悪死…いや、よそう。命が今あるだけでもいい。それにこれが夢じゃないってのはあいつらと話したときに確認した。そりゃもう嫌と言うほどに。

あとさっきの武装も見る限りレベル1のころ……最弱のころに逆戻りしている。芥骨一本、か。またやり直した。つまり今の俺は『?????』ではない…なんだ、思い出せない。いや、今はいい。

先の話の限り俺は『プログラム』という存在のままこの世界に来たことになる。しかし基礎的な体に関しては普通…まあ魔法使いということを除けば普通の人間のように思える。けど違う。普通ではない。『?????』が。『?』が。『?』が。駄目だ、もやがかかったように思い出せないがそれは普通じゃない何かだ。何か俺であって違う俺がいるように感じる。

糞、落ち着け。とりあえず周囲についてだ。

あいつらと話していて疑問に思う点がいくつかある。まずジユエルシードの存在。

あいつらは願いを叶える石としか言っていなかったが願いを叶える、なんて漠然とし過ぎていて。恐らくまだ何かを知っているがそれを黙っているだけ。とするとさっきの情報もどこまで本当かわからねえな……

とりあえず今はこの世界に俺の『居場所』を創らねえと。流石に『ハセヲ』という名前だけじゃどうしようもねえし……名前もそう言えばハセヲとしか言っただけな。状況が状況だったが姓名くらはいはちゃんと創った方がいいだろう。

…安直だが『三崎 ハセヲ』と名乗ることにしよう。俺の本当の名前がなんなのかはつきりしないが今思い出せる俺の姓名はそれだけだ。

あいつらはこの世界の人間ではないと言った。ならばこの世界に戸籍などを偽装する手段があるということ。幸い俺の見た目もどうやら目立ち過ぎると言っただけではないようだ。この町には外国人がかなりいる。まあ銀髪ってのはちょっと目立つだろうがそれでもちよつとだろつ……そうであつてくれ。アルビノということで見捨てられるかもしれない。

にしても流石にタオル一丁ってのはなあ……フェイトには悪いけど早く下着買ってきてもらわねえと。服もあればいいがあいつの話だと女物しかないし……女装はちよつと、なあ。アルフはズボンを持ってたがサイズが違う……

フェイトを裏切るってのは……無理だな。俺が俺として存在する以上あいつらに依存するしかねえ。クソ腹立たしいが今の俺は無力だ。

ああ、落ち着いてきたらなんだこの理不尽は。なんで俺がこんな目に遭わなきゃならねえんだよ。なんでこんなことに……畜生、どうしようもねえなら魔法をなんとかマスターしてあいつに貸しを作らねえようにしねえと。まだあいつらは信頼できねえ。元の世界に戻るためにも一刻も早く現状を何とかしないと



にしても女の子の前で…あんな醜態を晒すというのはちょっとな  
…志乃や？E？」「？”？@？” “にバレたら何言われるかわかったも  
んじゃねえ。

この世界とは違うどこかで、眼鏡の優男と黒衣の淑女がそ  
ろってくしゃみをしていたことを、ハセヲは知らない

そう考えをまとめると俺は改めて落胆した。置かれた現状に。そ  
して何もできない俺自身に。

余談だがこの数分後、衣類を用意してくれたフェイト達に赤面し  
ながら感謝を伝えたのは語るまでもない。

Side:ユ一ノ

昨日の一件から夜が明けて。珍しく早起きしたなのはと僕は向き  
合いながらも話すことなく、重い空気を漂わせていた。

僕がこの世界にきてもうすぐ僕も完全復帰するという矢先でまた  
予想外の事態が発生したからだ。

それは黒衣の襲撃者の出現。

推測だけど、彼女は管理局でもない、フリーの魔導士。そして彼女はジュエルシードを求めているということ。

僕にはどうして彼女がジュエルシードのことを知っているのかわからない。あれを発掘したのはつい最近だとしてこの世界に流れ着いたことを知っている？あの事故は仕組みれていた？でもあんな年端もいかない子があのようなことを引き起こすのだろうか？ではその裏にいる人物とはいったい？スクライアの関係者？次元犯罪者組織？裏切り者がいるのだろうか？でもなぜ、何のために？

ああ、だめだ。思考がぐるぐると同じところを回ってしまう。ジュエルシードを発掘して、僕はあまりに多くの人を巻き込み過ぎた。この罪は償いきれるものじゃない。僕が、僕さえしっかりしていれば……！！

「ユーノ君、また前と同じ事考えているよ」

「なのは……？」

「言ったでしょ。それは仕方がないって。発掘したユーノ君は悪くないって。それにジュエルシードを止めるためたつた一人で戦ってきたんだよ……もう、そうやって自分を責めないで」

確かにそうなのかもしれない。発掘後の輸送は僕の手から離れていた。でも、そもそもの原因は僕が発掘したことであって……

「ほら、またそんな顔してる……わたしじゃそんなに頼りにならないのかなあ」

「そ、そんなことないよ！なのはは才能だってある。こんな短期間に、あのレベルの魔導士と渡り合えたんだ！！自信を持っていい位だよ！？」

俯きかけるなのはに慌てて答える。事実、なのはの才能は凄まじいの一言に尽きる。この短期間で正規の教育を受けた高位の魔導士

と渡り合えるくらいに成長している。魔導士という存在自体が世界すべての人口に比してそれほど多いわけでもないのに、だ。きっと、無数に広がる次元世界においてもこれほどの才能に恵まれた存在はそうそういない。それがまして管理外世界ともなればなおさらだ。

本人は運動音痴と言っていたが彼女の戦闘の才能は天稟。まさしくその名の通りだ。1を教えれば10を身に着け、戦えば戦うほどにその力を増していく。空恐ろしく感じるほどに。

「うーん、でも、あの子の名前、また聞きそびれちゃったなあ…せっかくユ一ノ君と対策も練ったのに」

「そう、だね…あの子は訓練も受けた、正当な魔導士だと思う。術式も戦術もしっかりしていたし」

「そうだね。でも今度は負けないよ。私、あの子の気持ちを聞いてないから」

そう言っただけなのは力強く拳を握る。今度は負けないと。諦めないとその瞳が言っている。

本人は自覚していないんだろうけど、なのは結構負けず嫌いな所がある。学校についていくことはできないけど、彼女の口から伝わる言葉にはその思いが知らず知らずのうちだろっけど込められていた。

そんななのは、僕にはとてもまぶしかった。

Vo1.2 : 輪廻(後書き)

アトリオミット。無理に出させなくてもいいかなど。ハセヲの経緯も改変。

感想、ご指摘お待ちしております。

Vol.3 : 善意

志乃が意識不明になってから……俺は一人だった。

その時、俺に残されたものは

『トライエツジ三爪痕』に対する復讐心だけだった。

そして、力だけを求め続け

俺は『死の恐怖』になった。

Vol.4 : 善意

Side : ハセヲ

肌を撫でる夜風が気持ちいい。今日は夜の搜索を打ち切ることに  
なった。望月の明かりが街並みを照らし出す。今となってはもう見  
慣れた風景だ。

この世界に来てもうすぐ1週間になる。そろそろこの『世界』  
にも慣れてきたことだしこれまでを振り返ってみるか…

まずフェイト達と出会った俺がしたことは情報の収集だった。

彼女達が言う『第97管理外世界 地球』が俺の知る『地球』とど  
う違うのか、まずはそこをしっかりと知る必要があったからだ。

結果的に言えばこの『地球』は殆ど俺の知る『地球』の過去だっ

たと言える。

仮に俺の住んでいた『地球』の西暦がこの『地球』の西暦と同じものだとすると、今俺がいる『地球』は西暦2005年…俺がいた『地球』の12年前になる。

しかし、だ。この世界が12年前の地球であるとしても技術的…電子技術的に大きな差があるといった印象を受ける。アルティメイト社は存在するが性能的にあの世界のOSには及んでいない。CC社もあるがオンラインゲーム事業に携わっていない…俺の居た『地球』では原子炉さえもネットワークの中に組み込まれていたほどだからというもあるが、素人目からしてもかつてのAuraのようなAIを作れるのかと考えると何とも言えない。それこそとんでもない技術のブレイクスルーが必要な気がする。

そう考えていくとこの『地球』はやはり似て非なるものと考えられる。そうなるとやはり頼みの綱は『魔法』だけ。

こればかりはフェイト、そしてジュエルシード頼みというわけか…

不安の種は堪えない。そのジュエルシードの搜索においてだが『対抗馬』が居ることを知らされた。

現時点向こう側はジュエルシードの制御方法を分かっておらず単に封印、回収しているだけというのも問題だ。

そうなると一度封印、回収されてしまうと俺が帰る術が全く分からなくなってしまう。

というのもこの世界において『次元』を渡るのは可能であるが『並行世界』などというのは絵空事だという。

そうなるかと並行世界から来た俺は彼らにとって全くと言っていいほど未知の存在であり俺の帰還方法など知る由もない。

そしてその帰還には恐らくであるが召喚の原因となったジュエルシードが必要だということも。

彼女：フェイト・テストロッサ曰く「ジュエルシードの制御方法も分かっているし、あなた達を呼んでしまった私にも責任があるから」ということでジュエルシードが揃った場合俺たちを送り返すと約束している。

なぜ向こうが知らないことをこっただけが知っているのかと言うのは甚だ疑問でもあるが情報源がないため信じるしかない。完全に信用はできないとはいえ今頼りになるのは彼女だけなのだ。

魔法の世界に召喚されるとかありえない現状に呆れ、それが現実だと受け入れられる自分にビククリだ…

『あいつ』ならそう言うんだろうなと苦笑しつつ、現状を受け止めている自分はどこがおかしいのかもしれないと思う。

こういう事態は予想しなかったが本当の『世界の危機』なんてものに立ち会ったせいなのかもしれない。常識と言うものに対して感覚が鈍っているのかもしれない。

まあ、そのおかげでこんな非現実的な現実で発狂せずにいられるのだが。

## 閑話休題

さて、対抗馬がいると言うことはこちらの回収作業に対し妨害が入ると言うことだ。向こうも魔法使いと言うことであり俺も戦う術を身につける必要がある。

そこでフェイトに依頼したのが『魔法の訓練』だ。幸い俺は筋がいらしく基本的な念話などの魔法はすぐに使えるようになりデバイスを使った魔法の訓練もすぐにできるようになった。

今日の午後5時ごろ

「ハセヲもだいぶ慣れてきたみたいだし、私と実戦形式で訓練しても大丈夫そうだね」

「ああ、そうだな。細かいコントロールもだいぶ出来るようになってきたし実際に魔導士の戦い方を覚えていかねえとな。」

日中のジュエルシードの搜索を早めに切り上げ、現在屋上で魔法の練習中。幸い俺の魔法の筋は良いようで、練習開始からそう日も経っていないが実戦形式の訓練に移れる。とはいえまだ師であるフェイトには遠く及ばないのが実状だ。実戦形式と言っても懸り稽古のような形になるだろう。

訓練をし、ともに生活していく中でフェイトは俺のことを敬称抜きでハセヲ、と呼ぶようになった。まあ俺がなんかむず痒くて呼び捨てでいいって言ったのもあるんだが。

俺自身変に気を使われたりしても嫌だったので極力素でフェイトと話をしている。



実際戦場ではお互いの背を預けることになる。信頼関係はあるに越したことはない。信頼できない味方なんてもんは敵より厄介だ。

「それじゃアルフ、結界の補強お願い」

「あいよ！すっかり結界は張っておくから遠慮せずやっちゃいな！練習時に周囲に張ってあった結界が補強される。これでどれだけ暴れても周囲への影響は出ない筈だ。

「そんじゃ…いくぜフェイト！」

「いつでもどうぞ、ハセヲ」

既に飛行魔法も習得してあるため訓練も空中戦がメインとなる。黄昏色に染まる空に二つの影が舞い上がった。

お互いに距離を取りデバイスを構える。彼女の得物は鎌刃を発生させることのできる長杖型のデバイス『バルディッシュ』、こちらの武器は双剣 『インスクライヴ』と名付けた俺のデバイスだ。

まずは牽制打。フェイトから習った直射型射撃魔法『フォトンラッサー』<sup>フォトンスファイア</sup> 周囲に生成した発射体から、槍のような魔力弾を発射する魔法。連射可能で弾速に秀でる代わりに誘導性能を持たないを3発セットで2連射する。

もちろん当たれば御の字だが相手は魔導の師匠でもあるフェイトだ。そうそう当たる訳がない。

ここで俺は発射タイミングを微妙にずらす。周囲に展開している魔力弾を右方向から順にわずかであるが遅延させる。

そしてこちらの予測通り黒のマントを棚引かせ、鮮やかな金髪の少女は俺の牽制打をその場から左方向に難なく避ける。

だが牽制と言つのはそもそも2手目3手目のための一撃だ。回避コースが予定通りであるのならこれは成功したと言えるのだ。

続いて2手目、同様にフォトンランサーを展開、射出する。この時さっきのように真つ直ぐ飛ばすのではなく角度をつけ回避コースをさらに絞る。今度は左方向に偏差撃ち　未来位置予測での発射　をする。

この時の予測は通常より大きめ。これで上方か下方への回避になるだろう。

だがフェイトは自分もフォトンランサー展開し迎撃。その陰に隠れ左方向に抜けながらバルディッシュをサイズフォームに変更、そのまま魔力の鎌刃を生成し誘導制御型射撃魔法『アークセイバー』

生成した魔力刃を放つ誘導性のある射撃攻撃、単発であるがバリアを『噛む』という特殊効果があり変則的な弾道を持つ非常に厄介な魔法　を放つ。

これを食らった場合確実に足止めをされてしまうのでフェイトに行動の幅を広げられる可能性が高い。

そこで俺がとった選択は同じく迎撃。双剣に魔力刃を形成し文字通りアークセイバーを切り払う。

軌道が不規則であり誘導性を持ったため下手に回避して隙を見せるより少しでも早く撃ち落とし次の行動に出るための仕込みだ。

しかし切りはらう隙にフェイトは高速移動魔法『ブリッツァクシヨン』　その名の通り雷光の如く目にも止まらぬ高速移動で俺の背後へと移動する。

「はあー！」

「いきなりマジかよ!!」

交差する魔力刃。撃ち落とす段階でフェイトが死角を取りに来るのは予想できた。片方の刃でバルディッシュの鎌刃を止める。

「最初だしハセヲはそれなりにできると信じているから。これくらいじゃないとね」

「そりゃうれしいお言葉でッ!」

そのまま2合、3合と切り結ぶ。フェイトは長柄の鎌。懐に潜り込めば小回りのきく俺が有利だがそう簡単には潜らせてくれない。鎌を自由自在に振り回し変則的に切り込んでくる。だが俺も昔は大鎌を武器として扱っていた身。ある程度の動きなら反応が出来る。

そうして打ち合っっていくうちに次第に俺が押し始める。バーチャルとはいえこの武器とは何度も相対している。不慣れな魔法戦とはいえこれはこちらに分があってもおかしくはない。二刀の連撃、その合間に蹴りを織り交ぜ、隙あらばダックインからのラッシュを狙う。長物でこの距離は流石に辛いのかフェイトの表情が険しくなっていく。

この間に魔力弾をフェイトの死角に生成しフォトンランサーを撃ちこもうとしたのだが…

「チィ!!」

「やるね、ハセヲ!」

お互い目論見は同じだったようだ。俺は右へ飛びフェイトは左へ飛ぶ。俺らの居た所は魔力弾が交差し爆発する。

仕切り直し。魔力弾の衝突で生じた煙によりお互いの位置が不明になった現在、先に敵を発見した方が断然有利になる。

そして先手をとるためフェイトの魔力を感知しようとした瞬間。

「！遅延弾かッ！！」

フェイトが展開した魔力弾は全て消えたのではなかった。3、4発を後方に設置したまま保持し俺が回避した直後その方向へと打ち出したのだ。

そしてその魔力弾は寸分たがわず俺の方へと殺到する。

「クソがッ！」

回避は間に合わない。そう判断した俺は防御魔法である『ディフェンサー』を発動する。

これはフェイトがよく使う防御魔法だが俺はフェイトに対し防御力をかなり高めてある。

そして数発の魔力弾を防ぎ、晴れた視界から再度フェイトの姿を確認しようとした瞬間

「チェックメイト、さすがにいきなりは厳しかったかな」

俺の首筋には鎌刃が添えられていた。

「ふう、もう少し手加減してくれてもよかったんじゃないか？」  
「ううん、ハセヲは飲み込みが早いからこれくらいでやった方がいいと思う。それにハセヲも本気で『来てた』でしょ？」

確かに本気で行ったのは違いない。教えてもらっ側としては、模

擬戦は本気でやって初めて効果を発揮する。

まあ今回初戦と言うだけあり胸を借りるつもりで挑んだのだが。

「んで、どうだった？俺の動き」

「そうだね、ハセヲは私みたいにスピードに特化しているわけじゃないから…防御を固めて堅実に押していく方がいいと思う。さつき少し打ちあったけど近接戦なら相当な使い手みたいだし。あと魔力の安定性は私よりもいいからブリッツアクションの連続精密発動とかもいけるかも。でも今はまだそれは難しいかな」

フェイトは防御より機動力に重きを置いている、というより特化したスタイルだ。

それに比べ俺はスピードも並みにはあるがフェイトには及ばない。だがフェイトよりも防御力はかなり高く言ってしまうえば首相撲のような近接戦で殴りあうインファイターってところだろうか。

そこで俺に出された課題は『近接戦に持ち込むための射撃魔法』である。尤も魔法の取得だけなら早い俺はまだ魔導士の闘いに慣れていない。そのため魔力弾の使い方に関してまだまだひよっこ同然なのである。

「魔力弾の展開、制御ならできるが空戦はまだまだだな」

「うーん…こればかりはハセヲに慣れてもらうしかないかなあ」

「ま、あたしのようなパワーがあれば妹のようなものらしいのだがどね」

そう言うって話に入ってきたのはフェイトの使い魔のアルフだ。今は狼の形態ではなくオレンジの長髪をした人型のお姉さんになっている。フェイトからすれば妹のようなものらしいのだが。

アルフの戦闘スタイルは人のそれよりはるかに高い身体能力を利用した使い魔ならではのゴリ押しインファイト。隙を伺い高速で接近しバリアブレイクで防御を突破、一撃必殺の攻撃を叩き込むのがメインだ。

PTとして考えるとアルフが近接アタッカー、フェイトがオールラウンダーなダメージディーラー、俺がタンク（壁）といった感じだろうか。フェイトの万能性がよくよく感じられる構成だな。

「たしかにアルフ位のパワーがあればごり押しも行けるんじゃないかとは思うが。まあ俺は俺なりの戦い方を見つけるしかねえな」

「へえ、ハセヲ、あんた割と殊勝な事言うもんだね。ただのひねくれた不良だと思ってたけど」

「こら、アルフ！」

フェイトに続いて「一言多い」とアルフに突っ込みを入れ俺は先の模擬戦の反省をする。

魔力弾の使い方もだが俺の特性である精密制御を未だ生かし切れていないのも事実だ。恐らく単純な魔力でのごり押し勝負となるとフェイトには勝てないと思う。

そのため防御に関しても出力が低い以上受け止めるというより『いなす』防御を上手く使えるようになる必要がある。そして先のフェイトの発言にもある高速機動の連続精密制御。これも練習しないといけないな。

そういえばフェイトのマントいいなあね。俺も似たようなのつけてみるか…

「それじゃ、私は先にあがってるね」

そう言ってフェイトは屋上から部屋へと戻る。

その後ろ姿を眺めながらふと思う。あれで期望と同一年なんてな…と。

もっとうとう無邪気に遊んでいるべき年頃だと思うんだが。それに学校も通っていないしこの世界で初等教育は義務じゃないのか？まあ頭の良さは確認したが　遊び半分で出した高校レベルの数学問題をあっさり解きやがった。俺の苦労って一体　フェイトは大人び過ぎてている。

だがそれが何を意味するかは今考えても詮無き事だ。あいつにはあいつなりの事情がある。もう少し親密にならないと聞き出せねえか。

「さて、と。俺ももど「ハセヲ、覗きとかしようってんならあたしが相手になるよ」だ、誰が覗くか！！」

アルフに突っ込みを入れ、誤解されないように屋上で30分ほど鍛錬しながら待つことになった：

まあ、確かにフェイトはかなり器量よしだからな。普通に暮らせば変な虫がつきやすいのは間違いないだろう。このまま成長すれば…ん？今なんか寒気が走ったぞ。これ以上考えるのはやめよう。碌なことにならない気がする。

とりあえず今後の課題が見つかっただけでも良しとしよう。

と、こんな感じか。現状の確認はこれくらいでいいだろう。対抗馬の情報もほとんどないし今すぐどうこうはできない。進展と言えば俺がだいぶ現実を現実として落ち着いて居られるよう

になった事か。

そして明日の予定がなぜあのような形になってしまったのだろうか…

Side：フエイト

「ふう…」

狭いが必要十分なスペースのあるシャワールームで一息つく。風呂もそれなりに気に入って入るのだが忙しい身でもあるためゆっくり風呂に入るといふ選択肢はなかった。

「ハセヲが来て一週間、か…」

彼が召喚されてから1週間になる。その魔法の取得スピードは常人の比ではなかった。

何よりもうー昨日の段階で私と模擬戦ができるレベルにまで仕上がっているのがその証拠だ。まだ魔力弾の使い方が甘いとはいえ訓練を重ねていくうちにそれもなくなるだろう。そうなれば心強い戦力を手に入れることになる。

ハセヲの特徴として術式の構築が極めて精緻であることがいえる。防御魔法がいい例だ。ハセヲは緻密に作りすぎる故に詠唱、発動に若干のラグがあるがその分魔力のロスというものが少ない。それによりさっきの初歩的な防御魔法：ディフェンサーでは普通に組んでは考えられないレベルの防御力になっていた：今後の課題としては状況に応じて拙速さをとるか、遅巧さをとるかという選択ができるようにすることだろう。

そう、単純な防御力では私の倍以上、いやもっとある。おそらく



AAAランク砲撃に十分耐えうるレベル：まさしく『前衛』を体現している。いや、これはだれかを護る『騎士』じゃないのだろうか。

現在もう一人の搜索者は手練というわけでもなく、成長速度こそ空恐ろしいものを感じたけど私でも問題なく倒せるレベルだ。

それでも彼女を止める間に自分が封印する時間を稼げる戦力は非常に助かる。このままいけばあの子は彼に任せるだけでもよくなるかもしれない。というより彼のスタイル上あの子の攻撃にも十二分に耐えられるだろう。

これならジュエルシード集めも早くなるかな：そう一人呟き、シヤワーを止める。淡い灯りに照らされた艶やかな金の髪から雫が垂れる。前髪を後ろにかき上げ天井を見つめる。その双眸には未だ見えぬジュエルシード搜索の決意と、遠く高次元世界にいる母への思いを秘めて。

体を拭き髪を乾かし着替える。ハセヲはまだ外で訓練しているようだった。彼はいつも私がシャワーを浴びると言うとお風呂と屋上へ訓練に行く。気遣ってくれているんだろうけどアルフがいるならそんなに問題じゃない気がするけどなあ。

リビングでは既に食器が並べられている。訓練前に準備だけはしていたのだ。

私がレトルトものばかり食べていると聞いて料理本片手に調理しているハセヲはなんとなく微笑ましかつたし嬉しかった。本人は外食ばかりでこうやって自炊するというのはあまりなかったらしいけど、塩加減とかはかなり細かくできていた。ただ、そういう細かい味付けこそ上手なだけで：包丁を扱うとなると手元が危なっかし

くて結局私も手伝うことになっちゃったのはご愛嬌、というやつなのかな。

念話で2人に食事を取ろうと提案する。向こうもきりがよかつたらしくすぐに部屋に来た。

汗をかいているハセヲはそのままシャワーへ。男の子だからだろうが私よりかなり早い。

アルフの方は殆ど汗をかかなかったらしく食事の後でいいよと言っていた。事実ハセヲは肩で息をしていたのに対し、アルフは全くと言っていいほど疲労を見せてなかった。

そのまま3人で食事。今日は牛井とみそ汁、温野菜のサラダだった。

牛井はハセヲ曰く「牛井好きのやつに教わった。もうレトルトじゃ満足できないって五月蠅くてな。まあ男として手料理の一つくらい作れた方がいいし」とか言っていたけど確かにレトルトとは比較にならない。豆腐やしらすが入った豪華な牛井だ。私も覚えてみようかな。

でもこれってすき焼井っていうんじゃないかなあ。

ハセヲの家族について聞いてみたけどどこにでもいる普通の家庭裕福な方で親は共働き。家を空けることも多かったとか。私の家族に関しても教えられるところは教えた。ハセヲは最初の方こそ怪訝な表情をしていたけど、私の目を見て母親思いなんだなって優しく言ってくれた。ただ学校に通わせないというところには不快感を露わにしていたけど。

あと最近ネットゲームにつながられないのが結構苦痛になるとは思わなかったとか言ってた。向こうじゃ電子技術が発達していてネットワークの利用率もすごいらしい。そのため半分ネット依存とも言える社会だったとか。そういうのがなくなってしまうと生活に支障をきたすのは致し方ないのかもしれない。

「ハセヲは、向こうが恋しくないの？」

アルフとの今日の訓練の話が一段落したところで話しかける。彼はよくしてくれているけど不本意にこちらへ来てしまった人だ。果たしてこのままでいいのかと疑問に思っていた問いかけを試してみる。

「ああ…まあ恋しいってのはあるかもしれないねえな。でも今はフェイト達の方が最優先だ。俺がこの世界にいる以上お前らを放っておくわけにいくかよ。それとな、お前ちょっと焦り過ぎて無理してないか？立ち止まって周りを見るのも大事なんだぜ」

そう言っただけに微笑みかけながら言うハセヲ。

彼はどこか遠くを見るような眼をしている。話している中で向こうの事を思い出したんだろうか。ただ、その言葉に私を気遣う優しさが込められていることははっきりと分かった。

私が心配したはずなのに逆に心配されている。私もまだまだだなあ。

「うん…ハセヲの言うことも確かにそうだね。少しゆっくりしてみようか」

確かに体に無理しているのは間違いない。ハセヲが召喚されてからも今まで通り東奔西走としていた。

思えばゆっくり体を休めたりなどはしていなかった。ただ我武者羅にジューエルシードを探して飛びまわり続けただけ。よくよく考え

れば効率も落ちていた。そろそろ休憩の一つくらい入れたほうがいいのかもしれない。

そう思い軽い気持ちで言ったところ…

「んじゃ明日にでもハセヲとフェイト、二人で街に出てみたらどうだい？その間あたしが搜索しておくからさ」

えっと…アルフ？いきなり何言いだしてるの？

「お、おいアルフそりゃデー」たまには息抜きも必要だろう？2人とも訓練にジュエルシード搜索にと疲れているだろうし息抜きしてきな」…おい俺の言うことを聞けよ！？」

「あ、あの、その……」

顔が一気に熱くなる。予想外の発言、そしてハセヲが口に出しかけた言葉の意味を理解してさらに顔に熱がこもるのを感じた。

「ちょよ、ちょっとアルフ！？なんでいきなりそんな提案を！？」

「いや、フェイトって男の子と話す事なかっただろ？ちようどいい機会じゃないか。耐性つけてきなよ」

いや、耐性って何？確かに男の子と話すことなんてなかったけど、でもあんまりにもいきなりすぎやしない！？そしてなんでそんなニヤニヤしてるの！？ってハセヲも赤くなってるし！？というか固まってるよ！？

「それじゃ、明日に備えて休んどきな。あたしもシャワー浴びて

くるから。それじゃ」

「ちよ、待ておい！」

そう言うなりさっさとシャワールームへ行ってしまうアルフ。その頬がかなり緩んでいることに私は気付かなかった。さすがのハセヲもそこに逃げられるとどうにもならないらしく虚空を見つめて呆然としている。

「あ、えーと……………フエイト?…どうする?」

「ハ、ハセヲが…いいなら……………いい…けど……………」

すぐくぎこちなく聞いてくるハセヲ。むしろこの状況でなんとか切りだせるほうがすごいのかもしれない。

恐らく何があってもアルフのことだ。デ、デートになるんだろう、もう腹をくくるしかなさそう。

「あ、ああ、その…なんだ…宜しく頼む……………」

「あ、いえ、こ、こちらこそよろしくおねがいます……………」

「……………あ、お、俺ちよっと涼んでくる！」

そう言っただけでハセヲは外へ出て行ってしまった。

アルフ、ひどいよ…なんにもこういつ時にそんな事言わなくてもいい気がするのに…明日どうしよう…

次回波乱のデート!! 正妻に隠れ浮気(?)

したハセヲに下される天誅とは!? 乞うご期待!!

……………続くかあ!!…ハッ、私は何を……………というか正妻って何……………?  
?

Vol.3 : 善意（後書き）

感想、誤字報告お待ちしております。

メインで書いている方が進まない…5000字書いて、さらに展開させようと思ったら3000字くらい必要になった…どうしようとな  
なの…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2264z/>

---

リリカルなのは.hackers（仮題）

2011年12月17日11時54分発行